

# 町田市原爆被害者体験記録作成プロジェクト 報告(2)事後調査からみる体験継承としての 「語り」の意味とその教育的効果

伊藤, 正子 / IT0, Shoko

---

(出版者 / Publisher)

法政大学現代福祉学部現代福祉研究編集委員会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

The bulletin of the Faculty of Social Policy and Administration :  
reviewing research and practice for human and social well-being / 現代福  
祉研究

(巻 / Volume)

13

(開始ページ / Start Page)

73

(終了ページ / End Page)

97

(発行年 / Year)

2013-03-01

(URL)

<https://doi.org/10.15002/00008733>

## ＜調査報告＞

# 町田市原爆被害者体験記録作成プロジェクト報告（２）

—事後調査からみる体験継承としての「語り」の意味とその教育的効果—

伊 藤 正 子

【抄録】 本稿は、町田市と本学の協働プロジェクトとして実施した「町田市原爆被害者体験記録作成プロジェクト」について、その目的である体験継承の達成状況、および体験の聞きとりが「語り手」「聞き手」のそれぞれにどのような体験となったのかの評価を試みた調査報告である。評価方法は、「語り手」である原爆被害者においてはアンケート調査を、「聞き手」である学生にはKJ法によるふり返りを実施した。原爆の被害者にとって大学生に被爆体験を語ることは、①気持ちの肯定的な変化、②生き残った者としての祈り、③＜被爆＞の再解釈・更新作業、④真剣な聞き手の発見、という４つの意味が込められていることが見出された。また学生にとっての被爆体験の聞き取りは、単に原爆投下を過去の出来事として知ることにとどまらず、自らが体験を聞き取った継承者として今後どのように発信・行動すべきかとの問題意識とつながって、深く心に刻み込む学びとなったことが明らかとなった。

【キーワード】 原爆被害 体験継承 語り 聞き取り 教育的効果

## １．はじめに

町田市原爆被害者体験記録作成プロジェクト報告（１）で述べられているように、大学生による被爆証言の映像化活動は、関係者内外から筆者らの想像をこえる反応を生むこととなった。たとえば、DVD完成報告会では、ある被爆者から「このままで終わらせるのではなく、より深く、原爆について勉強を進めて行ってほしい」とさらなる期待の声かけられ、また一般市民向けの報告会では、東京大空襲の経験者から「こういう活動をしてくれてうれしい。ありがとう」と学生に対して直接お礼の言葉がかけられた。また毎日新聞においては、長崎市と広島市の両原爆資料館が「これまで行政と大学の連携で証言映像を残した例はない。新たな動きとして注目したい」と話しているとして、「被爆体験継承の一つの形として注目を集めそうだ」と取り上げられた。

これらの社会的反応を受けとめながら、プロジェクトの最終段階として、映像記録化の目的で

あった「体験継承」がどれ程達成されたのか、また聞き取り調査が、被爆者・学生のそれぞれにとってどのような体験であったのかをふり返ることで、本プロジェクトの評価を試みた。

ことに被爆体験を表現することについては、語り手にとってのその体験を非常にセンシティブに、そして慎重に受けとめなければならないと考えた。なぜならば、原子爆弾を投下された広島は、アウシュヴィッツとともに全人類に対する最も恐ろしく残酷な犯罪として、それぞれが比較を拒むほどの前代未聞の殺戮現場であると称される程であり、また多くの人びとがその体験を語ることに困難を抱え、いまだに語らない被爆者が多いことはよく知られている。そのような方々に被爆の体験を語っていただくことは、さらに二次的外傷を負わせる危険性を孕むものだからである。

一方、PTSDからの回復の作業としての「語り」の効果も認められているところであり、「よい聞き手」が存在したとき、過去の体験の捉え直しや人生の意味を再統合する過程への援助となることがある。したがってこれらのことを念頭におきながら、本プロジェクトにおいて聞き取りを実施するにあたっては、少なくとも「語る」ことによる二次的被害を避けることを優先的な留意事項として、その上で、可能であるならば被爆者が「語る」ことに対して何らかの心理的援助ができればというささやかな願いをもって取り組んだのであった。したがって、プロジェクト評価のための事後調査においてもまずはこの部分を確認する必要がある。

また学生においては、「よい聞き手」としての調査活動、すなわち日程調整から、聞き取り面接・撮影、編集までのプロセスについて、語り手からと学生自身によるものとの双方向からの評価を検討すること、および学生が原爆被害の証言をどのように受けとめたのかをふり返り、整理することで「体験の継承と平和教育」という目的がどの程度達成されたのかを検証することとした。

## 2. 倫理的配慮

事後調査は、町田市の承認を経て、プロジェクトの協力者と聞き取りを行った学生に対して行った。協力者に対しては、アンケートの承諾をした方に無記名式の調査を行った。調査結果は数的に処理を行い、個人が特定されないように配慮した。教育的効果については、教員である筆者らより主旨説明を行った後、学生主導でふり返りの討議、および結果の整理・評価を行った。なお、本プロジェクト全体の実施にあたっては、法政大学大学院人間社会研究科研究倫理委員会の承認を得ている。

### ３．プロジェクト評価のための事後調査の目的と方法

事後調査では、次の３つ、すなわち①被爆体験を「語る」ことが被爆者にとってどのような体験であったか。②「語り手」である被爆者からの、「聞き手」である学生の評価はどのようなものであり、援助者養成においてどのような成果が得られたのか。③被爆体験の継承はどのように達成されたのか、を明らかにすることを目的とした。

調査方法としては、協力者に対しては郵送自記式の無記名アンケート調査を、学生に対してはグループでの意見交換を行い、KJ法 によって整理・検討した。調査結果の集計は学生の代表者数名が行い、分析は筆者らが行った。調査期間は、2012年５月27日に発送し、同年６月８日までに回収を終了した。調査対象として全協力者16名に郵送し、回収数は入院中の１名を除き15名（回収率93.7%）であった。

質問項目は、まずプロジェクトに参加したことについて、①これまでの家族と町友会会員以外へ被爆体験を話した経験の有無、②今回プロジェクトへ参加協力した理由、③被爆体験を語っての感想を次に、学生による調査の進め方および聞き取りについての評価として、①日程調整、②話しの聞き方、③完成したDVDについての感想、などの点について質問した。また最後に、町田市、学生、大学に対する意見・要望などの自由記述欄を設定した。

聞き手としての学生に対する事後調査は、2012年６月18日、本学現代福祉学部の教室にて、まず２グループに分かれてふり返り作業を行い、次にそこで出された意見全体についてKJ法によってカテゴリー化し、各カテゴリー間の関係性を検討した。

ふり返りの内容は、①原爆について一体験者の「生の声」を聞いてどのようにとらえ、あるいはとらえ直したか、原爆や戦争について勉強しておけばよかったことは何か、②聞き取りについて一配慮や工夫した点、成功した点、反省点、聞き取り後の自らの変化とその内容、③調査全体を通して一学んだこと、反省点等、を主な柱として、自由な意見交換や相互の解釈が行われた。なお、この日に出席できない学生には、あらかじめ振り取りシートに記入して提出してもらい、それらを含めて検討を行った。

### ４．原爆被害者（協力者）への事後調査結果

#### （１）主な属性

図表１は、事後調査協力者の主な属性である。性別は、男女ほぼ同数であり、年齢では80歳以上が８人（53%）と過半数を占めていた。家族と町友会会員以外に被爆体験について話した経験

は、今回を入れて「5回以上」が7人(47%)と最も多く、「その他(「多数回」: 3人、回数不明: 1人)」4人(27%)、また「2回以上」3人(20%)、「初めて」が1人(7%)と、これまでほとんど語ることのなかった方も参加していたことがわかった。「5回以上」という数字をどのようにみるべきか、原爆投下から今日までに70年弱の月日が経過していることを考慮するならば、それは決して多くはないということができよう。

図表 1 主な属性

| 基本属性                 | カテゴリー   | 人数 (%)  |
|----------------------|---------|---------|
| 性別 (n=15)            | 男性      | 8 (53%) |
|                      | 女性      | 7 (47%) |
| 年齢 (n=15)            | 70～74 歳 | 4 (27%) |
|                      | 75～79 歳 | 3 (20%) |
|                      | 80～84 歳 | 4 (27%) |
|                      | 85～89 歳 | 1 ( 7%) |
|                      | 90 歳以上  | 3 (20%) |
| 被爆体験を話した経験<br>(n=15) | 初めて     | 1 ( 7%) |
|                      | 2 回以上   | 3 (20%) |
|                      | 5 回以上   | 7 (47%) |
|                      | その他     | 4 (27%) |

他方、「多数回」との回答者は、「近隣、友人、職場、子どもたちなど、過去を語る時に被爆体験はほとんど入っていた」、「教員時代に時々生徒に話した」など、身近な人のみならず地域や職場などでも日常において折に触れて語ってこられていた。

プロジェクトへの参加理由は、「無残さを若い世代に伝えたいと思ったから」13人(81%)、「自らの経験を後世に残したいと思ったから」12人(75%)、とほとんどの人がこの2つを選択しており、体験を語り継ぎ、記録を残すことへの強い想いが込められていることがわかる(図表2)。

図表２ プロジェクトに参加した理由（複数回答）

| 質問項目                    | 選択肢                 | 人数 (%)   |
|-------------------------|---------------------|----------|
| プロジェクトに参加した理由<br>(複数回答) | 無残さを若い世代に伝えたいと思ったから | 13 (81%) |
|                         | 自らの経験を後世に残したいと思ったから | 12 (75%) |
|                         | 法政大学に協力したいと思ったから    | 9 (56%)  |
|                         | 町田市に協力したいと思ったから     | 8 (50%)  |
|                         | その他                 | 3 (19%)  |

## （２）被爆体験を「語る」ことについて

被爆体験を語った後の感想は、「大変良かった」11人(73%)、「まあまあ良かった」3人(20%)、「あまりよく思わなかった」「後悔している」はともに0人となっていた。調査票を送付した時期に長期不在であったため多くの質問について無回答が多かった1名を含めても、ほとんどの方が肯定的な評価であることが明らかとなった。

語って良かった理由は、「体験の整理ができた」が8人(47%)ともっとも多く、次いで「気持ちの変化」が3人(18%)、「その他」が4人(24%)であった(図表3)。

図表３ 体験を語っての感想と「良かった」と感じた理由

| 質問項目                               | 選択肢         | 人数 (%)   |
|------------------------------------|-------------|----------|
| 体験を語っての感想<br>(n=15)                | 大変良かった      | 11 (73%) |
|                                    | まあまあ良かった    | 3 (20%)  |
|                                    | あまりよく思わなかった | 0 ( 0%)  |
|                                    | 後悔している      | 0 ( 0%)  |
|                                    | 無回答         | 1 ( 7%)  |
| 「大変良かった」<br>「まあまあ良かった」理由<br>(複数回答) | 体験の整理ができた   | 8 (47%)  |
|                                    | 気持ちの変化      | 3 (18%)  |
|                                    | 人に話す抵抗が減った  | 1 ( 6%)  |
|                                    | その他         | 4 (24%)  |
|                                    | 無回答         | 1 ( 6%)  |

良かった理由について、その具体的な内容とこれまでの「語り」の経験数との関係を見るために自由記述欄とクロスしてみた。すると「初めて」～「2回以上」の経験数が少ない方のなかで、「2回以上」と答えた3人のうち2人に自由記述がみられた。その具体的な内容は、「体験の整理ができた」および「人に話す抵抗が減った」の2つの理由を選択し、「今迄は涙が先に出て中止することが多々あった」との記述（1人）、および「気持ちの変化」という理由と、「体験を積極的に語るべきだと思えるようになった」との記述（1人）であった。すなわち、これまであまり語ってこなかった方にとって、被爆体験を他者に語ることは、気持ちや体験の整理を行う場となったことにとどまらず、他者に話す抵抗が減ったり、さらにはより積極的な意義を感じる機会となりえたことがわかった。

前述したように、本プロジェクトによる二次的被害の影響が懸念事項であったが、上記の回答では、むしろ語ることにについての印象が肯定的に変化している様子がみられたことから、被爆体験の聞きとり調査は、語り手にとっても少なからずの意義があったものと評価できると思われる。

他方、これまで多数回語ってこられた4人の理由をみても、「自らの経験を後世に残したい」は1人で、残りの3人は「町田市に協力したいから」「法政大学に協力したいから」を選択し、さらに1人は「その他：町友会再建に携わった者として。放射能後遺症の苦しみを背負った被爆者は亡くなり、生存者の口は重い今日、少しでも実相を伝える事ができたら」と回答していた。これらのことから、証言を多数回行ってきた方にとっては、＜被爆体験者＞としての個人的な気持ちの整理に加え、＜非核・平和を訴える証言者＞としての社会的な活動の場としてとらえられていることがうかがえた。

さらに、これらの回答者のなかで良かった理由の自由記述があったのは1人のみであったが、その理由として「DVDに残すにはこの機会をおいて他になかったから」と記されていた。映像による記録方法がこれまでほとんどなかった事実に変更が気づかされ、本プロジェクトの意義を再認識させるものであった。

語りの経験回数としてもっとも回答の多かった「5回以上」の回答をみても、回答者7人のうち、良かった理由の自由記述があるのは6人であった。これらの回答をみると、被爆体験を語ることは、「被爆体験者の義務だと思う」「無残に殺された人々の痛恨の思いを決して無駄にしないし、語ることによってせめてもの供養になったと思っている」「被爆体験の伝言が後世の幸福になりますように」など、被爆体験を語ることは自らの体験の回想のみならず、原爆によって亡くなった多くの人びとへの追悼や後世の平和への祈りの意も込められた行為となっており、また「若者が真剣に聞いてくれることを知った」「学生たちの前向きな心に触れた」と、真摯な聞き手の存在を新たに知る機会ともなっていることが明らかとなった。

その反面、「話しが下手で気持ちが先走って、若い人に理解出来なかったと反省しきり。残念だ」との理由で「良かった」選択肢と同時に「学生に理解してもらえたかどうかわからない」を選択された方も１人おり、学生の反応に対する若干の不安が残るインタビューとなったこともわかった。これについては聞き取りを行った学生の理解状況は確認できないが、学生からの応答が適切に表現されず、協力者に伝わらなかった可能性も否定できない。

### （３）語り手からみた聞き取り調査の評価

#### ①日程調整

聞き取り調査は、事前打ち合わせとしての１回め—プロジェクトの主旨説明、映像化および公開範囲についての意向確認、撮影当日についての打ち合わせ、２回め—証言の撮影、の２段階プロセスで実施した。個別の日程調整は、各班から協力者に直接電話をかけ、協力者と相談しながら日時・場所等を設定した。事後調査では、これら電話のかけ方、プロジェクトの説明の仕方など、個々の行為について詳細には問うていないため、厳密な評価であるとはいえないが、「語り手」としての協力者からの「学生の聞き取り調査」は概して高評価であったといえよう。

具体的には、「とても良かった」１３人（８７％）、「その他」２人（１３％）、「あまりよくなかった」０人と、ほとんどの協力者が肯定的に評価していた（図表４）。自由記述にみられるように「事前に詳細な連絡をいただき、１回目と２回目の間に時間的余裕をいただいて、自己流ながらまとめることができた」と２段階で行った点に対する評価、および「要領よく進め方の枠組みを決めてくれた。孫のようで可愛い人たちだった」、「良い学生に出会い、今の若い人は立派でうれしく、感激した」など、学生たちの一生懸命さが好評価につながったようである（図表５）。

#### ②「聞き方」

「聞き手」としての学生については、「話しやすかった」１３人（８１％）、「どのように伝わったか気になった」２人（１３％）、「その他」１人（６％）であり、ほとんどの方が「話しやすかった」と評価していた（図表４）。これは、「その他」の記述に「学生たちの素直な聞き方がうれしかった」とあるように、学生たちの真摯な姿勢が話を妨げることなく聞き取りを進行させたものと考えられるが、一方で「どのように伝わったか気になった」との回答もあるように、学生たちの理解について不安が残るインタビューもあったようである。

さらにコミュニケーション技法については、概して言葉づかい・相づち・「間」の取り方・応答の仕方については全体的に「良い」とする評価が多かった。事前の知識については、「良い・資料館見学により同じ目線で課題を共有することができた」と概して良しとする評価、「特に知識をも

つことは必要ない・傾聴する態度が重要・己の知識を出さず、真剣な態度で質問してくれてうれしかった」と知識ではなく傾聴の姿勢を重視する評価、および「広島・長崎の地理的概要・原爆がなぜ兵器として禁止すべきかの知識が乏しい」との事前の知識は必要であったとの評価に分かれていた(図表6)。

図表4 学生による聞きとりについて

| 質問項目                             | 選択肢                 | 人数 (%)   |
|----------------------------------|---------------------|----------|
| 日程調整 (n=15)                      | とても良かった             | 13 (87%) |
|                                  | あまりよくなかった           | 0 ( 0%)  |
|                                  | その他                 | 2 (13%)  |
| 聞き方 (n=16)<br>(複数回答)             | 話しやすかった             | 13 (81%) |
|                                  | どのように伝わったか気になった     | 2 (13%)  |
|                                  | 話しにくかった             | 0 ( 0%)  |
|                                  | その他                 | 1 ( 6%)  |
| 完成した DVD の感想<br>(n=22)<br>(複数回答) | 報告会をさまざまな所で開催した方がよい | 7 (32%)  |
|                                  | 30 分は短い             | 5 (23%)  |
|                                  | 一人ひとりを丁寧に伝えてほしい     | 2 ( 9%)  |
|                                  | その他                 | 7 (32%)  |
|                                  | 無回答                 | 1 ( 4%)  |

図表5 日程調整について：自由記述

|         |                                                   |
|---------|---------------------------------------------------|
| とても良かった | 事前に詳細な連絡をいただき、面接①と②の時間的余裕をいただいて、自己流ながらまとめることができた。 |
|         | 余裕のある日程だった。                                       |
|         | 要領よく進め方の枠組みを決めてくれた。孫のようで可愛い人たちだった。                |
|         | 一生懸命さが伝わってきた。                                     |
|         | 良い学生に出会い、今の若い人は立派でうれしく、感激した。                      |
|         | 老人ホームに居るので、先ず問題はなかった。                             |
| その他     | 不慣れなこと、スケジュール調整（関係者間の）に苦労していた。                    |
|         | 奇跡的に生き長らえ、覚悟の毎日。学生との行動日程が無事動まるか心配だった。             |

図表 6 コミュニケーション技法について（自由記述：（ ）内は重複回答数）

|                   |                                                                                       |
|-------------------|---------------------------------------------------------------------------------------|
| 言葉づかい             | 良かった。(4人)                                                                             |
|                   | 的確だった。                                                                                |
|                   | 優                                                                                     |
|                   | 丁寧な態度・言葉に現代の学生さんもいいなとうれしくなった。(3人)                                                     |
|                   | 身分をわきまえた感じのいい応答のできる方々だった。                                                             |
|                   | 気になったことは特にない。年輩者である私共に気を使われたことでしょう。                                                   |
|                   | 好感がもてたが、語尾まではっきりして欲しいと思うことがあった。                                                       |
| 相づち、「間」のとり方、応答の仕方 | 良い。(2人)                                                                               |
|                   | まあまあよろし。(2人)                                                                          |
|                   | 優                                                                                     |
|                   | 私の話す一言一句にうなずいて、被爆の惨状を理解して下さった姿勢にうれしく思っている。                                            |
|                   | 立派な態度で次代の人のこと安心した。                                                                    |
|                   | 長時間熱心に聞いてくれた                                                                          |
|                   | 皆さんは概して良好だった。相手の目を見て話すこと。自分を無にして相手に共感すること。理解できない時はその都度確認しておくこと・・・何事にも共通する留意点ではないだろうか。 |
|                   | 特に気になることはなかった。                                                                        |
| 事前の知識             | 今一。                                                                                   |
|                   | まあまあよろし。(2人)                                                                          |
|                   | 良かった。                                                                                 |
|                   | 原爆資料館を見学して学んで下さっていたので、同じ目線に立って課題を共有することができた。                                          |
|                   | 特に知識をもつことないと思う。聞きとりが目的だから。                                                            |
|                   | 余計な予備知識は不要で、傾聴するという態度が重要。                                                             |
|                   | 己の知識を出さず、真剣な態度で質問してくれてうれしかった。                                                         |
|                   | 今回の場合は「広島」「長崎」の地理的な概要が頭に入っていれば良かったのではないかな。                                            |
|                   | 原爆がなぜ兵器として禁止すべきかについての知識が乏しいと思った。                                                      |
|                   | 不明。変な返事・質問は無かった。                                                                      |
|                   | 機械の操作は撮影中ハプニングが起り中止となったが、仕方ないことだと思う。技師ではないので。                                         |
|                   | 占領軍プレスコード発する中、ジョン・ハーシー 蜂谷道彦等原爆関係、法政大学出版、原爆知識皆無の学生方にも、親近感を覚えた。                         |

### ③完成したDVDについて

完成したDVDについての感想は、複数回答で「報告会を様々な所で開催した方がよい」が7人(32%)と最も多く、「30分は短い」が5人(23%)（図表4）、「その他」は7人(32%)であった（図表7）。市の事業として予算等の制約があったことはやむを得ないものの、短い方でも30分、長い方では2時間近くあった各証言を、17人分で計30分に納めたことはやはり短すぎると言わざるを得ない。しかしながら、いずれにせよ被爆体験を映像記録として残したこと自体の協力者の評

価は肯定的であるといえ、様々なところでの開催によってより広めていってほしいとの期待が高いことから、このプロジェクトの意義は大きいといえよう。なお、町田市、大学、学生に対する今後の意見、要望は図表 8 を参照されたい。

図表 7 完成したDVDについての感想(4. その他: 自由記述)

|                |                                                                                                              |
|----------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 完成したDVDについての感想 | 複雑。様々な原爆状況よくまとめられたが、長寿の被爆者証言・被爆翌日の出来事をはなされる余裕等前後の話が分らぬ一般の方々に、常に戦災と全く違う、非人道的な原爆惨禍を伝えることができたか。何時まで経っても難しい問題である |
|                | 同じ被爆でありながら、一人ひとりの角度から語られた内容を知り、あんなこともこんなこともあったと思った。また、色々考え方も学んだ。                                             |
|                | 数ある体験の中で、私の一番伝えたかったことは、正にそのことだったという思いはしたが、それでも聞く人には私の“題”としては3分ぐらいでは伝わらないと思った。                                |
|                | この程度が限界ではないだろうか。高齢満 96 歳で耳が遠く、テープが良く聞こえないので、何とも言えない。                                                         |
|                | 被爆直前直後の話が抜けていた。また、カメラも完全固定でなく、7 対 3 位で聞き手側の映像を入れると印象深く残ったかなと思う。                                              |
|                | あらゆる機会をとらえて活発に行動して欲しい                                                                                        |
|                | 要領よくできていた。この時期に DVD を残せた意義が大きい。                                                                              |

図表 8 町田市・学生・法政大学にどのようなことを期待するか(自由記述)

|         |                                                                                                                                                                      |
|---------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 町田市に対して | 少子高齢化が加速度的に進行し、高齢者とどう向き合うか町田市も大きな課題を背負っています。大学においても福祉の中核を荷う人材の育成が待たれています。町田市は「福祉に理解があり先進都市」としての定評がありますが、このテーマの重みが益々大きくなることに対して、行政とそれを取り巻く福祉関係者はどう対処するか、一生懸命頑張ってください。 |
|         | 町田市は平和都市を宣言しているのですから、たくさんの活動の中でこの DVD を宣伝し、特に学校や集会などで平和について話し合い実践するチャンスのきっかけになるよう働きかけてほしいと思う。                                                                        |
|         | 家族に 2 歳、4 歳の子供がいる。安心して住める世界にしていきたい。                                                                                                                                  |
|         | 企画し発表していただき感謝している。                                                                                                                                                   |
|         | 非核宣言都市として未来に継承して下さることを有難く思います。                                                                                                                                       |
| 学生に対して  | 今回のプロジェクトに参加された方々が社会の中核を担う時はもうすぐです。その時は広島・長崎そして福島の人々の心の支えになって下さい。                                                                                                    |
|         | 大変ご苦勞様でした。日本としての被爆体験を風化させないために今後とも体験の伝承に一役買ってくださいを希望します。                                                                                                             |
|         | 学生には視野を過去、現在、未来に広くもってますます学び、福祉を通して平和への道を堅実にたゆまず励んでほしいと思う。                                                                                                            |
|         | 友人や家族、趣味のサークルや教会、ボランティア活動などの折にふれ、DVD を利用して平和への輪を拡げてほしいと思う。                                                                                                           |
|         | 広島、長崎は核の時代の起点です。そこから視野を広げて核のこと、放射能のこと、日本のこと、世界のこと、未来のこと etc. 特に学生たちには自分たちが拓く未来ということを強く自覚してほしい。                                                                       |

|              |                                                                                                                                                                                |
|--------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
|              | 学生の皆様は日本の中心的存在になられる方です。広島・長崎の教訓を忘れないで国の為頑張ってください。                                                                                                                              |
| 法政大学<br>に対して | 核兵器廃止、戦争反対の活動を続けて下さい。                                                                                                                                                          |
|              | 日本が三度も原子力の失敗をしたことを教育してほしい。                                                                                                                                                     |
|              | 2009 年 4 月 核なき世界、オバマ演説に期待したが、その後、新型核性能実験数回、無人攻撃機で誤爆等相変わらずの米国。核廃絶に消極的な傘下・同盟国日本。非核三原則・戦争放棄・非核平和都市宣言等だけで、手を汚さずこれからの国際社会で通用するのか、狭い日本で核・放射能核廃棄物の処理等問題山積。過去の悲劇ふたたび繰り返さない努力・知恵・行動を期待。 |
|              | 大学教育の一環として組み込まれることはとても良いと思う。戦争によって人の命を失う事、二度と戦争をしてはいけない事を学生に伝える機会になれば良いと思う（母が子を思う気持ち。20 歳まで育てた男の子を天皇様の兵隊として喜んで送り出すことの悲しさを知ってほしい。身をきられる悲しさがある。）                                 |
|              | 皆真剣な態度で過去の戦争体験・原爆の事を聞いてくれた。今後戦争を起こさない、国の間にどんなことがあっても戦争で解決しないで、どこまでも人間としての話し合いにより解決する努力を期待する。戦争は無残さを残すのみ。平和の楽しい時代を築いてください。                                                      |

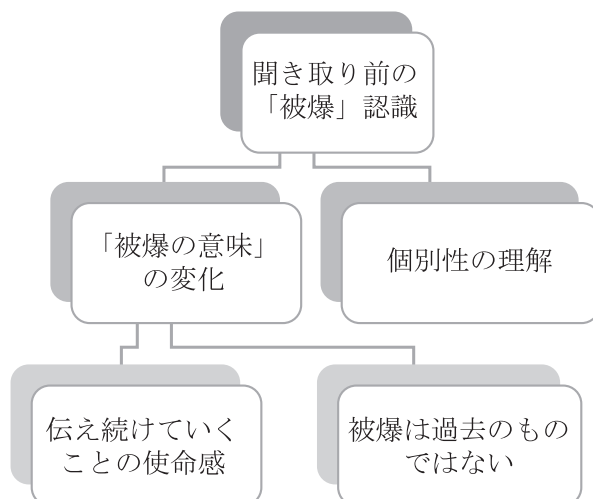
## ５．体験記録作成者（学生）への事後調査

### （１）被爆体験の「語り」から学んだこと

本プロジェクトにおいて、学生が被爆体験の聞き取り調査を行うことの教育的なねらいは、(1) 「被爆体験」を生声として聞くことを通して原爆・戦争について学ぶ、(2) 援助としての聞き取り面接の技法、および調査の一連のプロセスを実際に体験し、具体的に学び体得すること、であった。これらの成果を学生自身によって評価することを目的として、2 グループに分かれて意見交換を行い、そこで出された意見をKJ法でカテゴリー化し、各カテゴリー間の関係を検討した。

図表 9 は、教育的なねらいの (1) の結果を図式化したものである。ここでは、被爆体験の語り学生たちにおいてどのように受けとめられ、それによって学生たちの意識・認識がどのように変化したのかが描かれている。

以下、それぞれについてみていく。



図表9 聞き取りを行っての学生の意識・認識の変化

#### 【聞き取り前の「被爆」の認識から「被爆の意味」の変化】

生の声としての被爆体験を聴くことにより、学生たちのなかではまず「被爆体験」の印象が大きく変化したようである。すなわち聞き取りを行う前は、「被爆の体験は、つらい、悲しいといった悲観的なものばかりなのではないか」と考え、「(語り手は) 被爆しないほうが幸せだったと思っているだろう」「語りを聞く前は、被爆のことを語るのは辛いことであろうに、その辛くなることをなぜ敢えて話すのだろうか」と理由がわからなかった」との意見が出されていた。

しかし「語り」のなかでは、たしかに原爆投下は悲惨な事実ではあったものの、学生たちが予想していた「被爆しなかった人生を望む」といった意見はあまり出されず、むしろ被爆体験を後世に伝えていきたい、伝えていかなければならないという強い意志と、そのように行動する前向きな被爆者が目の前に存在していたのであった。また、ある被爆者の「被爆直後に体験したことが、助産師という「命を守る」職業に就こうと思わせた」という話を聞き、被爆に関わる体験がその後の人生に活かされたことを知ることとなった。

これらを受けて、「被爆をしない方がもちろん良かっただろうし、過去のことを思い出すときには後悔のような辛い気持ちもあるだろうけれど、そういうなかでも、被爆体験を悲観的に捉えているのではなく、むしろ被爆したことを活かし、人に伝えていかなければいけないと力強く、前向きに生きている。それは、被爆の体験をうけとめているからではないか」という意見が出された。

これらの話し合いのなかから、調査前は被爆者にとっては「つらく否定したい過去」であろうと思っていたことが、残酷で悲惨な事実だからこそ向き合い、二度と繰り返さぬように後世に伝えて

行くことを自らの使命としてとらえていること、また被爆体験が現在の職業や生き方に活かされているという事実を知ることにより、原爆という過去は、被爆者のなかでは「受けとめられている体験」なのだと認識に変化し、「被爆の意味の変化」というカテゴリーにまとめられた。

### 【個別性の理解】

被爆体験を聞き取ることで受けた印象を出し合うなかで、当然のことではあるものの、被爆者それぞれの体験が全く個別のものであることに気づいていく。被爆者の「語り」では、次のような様々な体験が語られていた。それはたとえば、「軍に所属する者として５日の空襲警報に備えていたものの、結局何もなかったため「今のうちに」と６日の早朝より部下を休ませたところに原爆が落とされ、私の命令に従った部下を全員死なせてしまった」と、万全の体制を整えていたなかで仲間を戦死させたことに対する尽きることのない無念さと生きている者としての罪の意識、あるいは「原爆投下直前は夫の出勤を見送った直後だった」「出勤して仕事を始めるところで、上司と話していた時だった」などのように、日常の家庭や職場における普通の風景が一瞬にして吹き飛ばされ、奪われた出来事だったこと、「被爆後なんとか家に帰ろうとしたときに見た多くの死体と、助けを求めて喘いでいる人に対して何も感じなかった」自分を省みて、「人間は極限状態になると残酷になる」ことを痛感したこと、「熱線による全身熱傷で顔の見分けがつかない子どもが近づいて、全身の力を振り絞って自分に笑いかけてきたとき、それが弟だと気づいたにも関わらず、そのまま立ち去ってしまったことに、今でも苦しんでいる」という長年の自責の念、その他、「アメリカ軍による調査の非人間的な対応への憎しみ」「原爆症を抱えてのその後の生活の苦しみ」「差別を受けて原爆のことを二度と口にしまいと母親と約束した」こと、そして「原爆投下後の地獄の底のような暗いビルの地下室で、自ら重傷を負った産婆が、新しい生命をうましめた場面に立ち会い、命を守る仕事を選ぼう」と、現在の職業を選択した決意の話などであった。

このような語りをふり返りながら、学生たちは「原爆といえばキノコ雲や爆発音、全身火傷で苦しむ人という、圧倒的で悲惨なイメージばかりだった。でも語られていた体験は、そのような「衝撃的」なものばかりではなく、軍の仲間のこと、家族、生活のこと、その後どう生きてきたかなど、全く個々別々の、『それぞれの原爆』だった」「それまでは＜被爆＞についてあまり考えていなかったけれど、お話を聞くなかで、原爆の体験は一人ひとり異なっていて、非常に個別のものであることがわかった」といった意見で合意していた。

さらに聞き取りのなかでは、学生たちの関心から「戦争やアメリカに対してどのように思っているのか」を質問している。これには、被爆者がアメリカに対して否定的に評価しているのではないかとの仮説が学生たちのなかにあったのだが、語りのなかでは、「恨んでいない」「アメリカという

大国には憎しみはあるが、アメリカ<人>については何も思わない」と予想外の意見が語られ、さらに戦争についての評価も「二度と戦争をおこしてほしくない」との意見もあったものの、「あの時代ではどうすることもできなかった<歴史の必然>である」というように評価が一樣ではなかったことにあらためて驚きの念が出され、原爆の経験も、戦争・アメリカに対するとらえ方も、実は多様であることが確認された。これらについて学生たちは「(被爆体験や戦争についての) とらえ方の違い」とまとめたが、それはすなわち被爆体験やそれに伴う戦争・アメリカに対する認識についての「個別性」を理解するに至ったものだといえる。

### 【伝え続けていくことの使命感】

語りを聴くなかで学生たちは、被爆者の「伝えていかなければ」という強い使命感を強く感じるようになっていく。生き残った者としての罪悪感に苦しめられてきた胸の内、原爆によって被害を受けた人生の意味、証言のために夜を徹して準備された原稿と新聞・写真等の多くの資料、戦争を知らない現在の若者と「平和な社会」への危惧と期待。そうした様々な想いや願いが込められた物語を聞いた学生たちは、「これを聞いた自分たちは、ちゃんと他者に伝えていかななくてはならないという使命感を感じた」、「(証言は) 目の前の自分に向かって話されている話しであり、<後世に伝えてほしい>とダイレクトに言われたため、自分のなかで責任感が芽生えた」と、自らのなかで原爆に対する向き合い方が変化したことを確認し合った。

さらに、「<あなたは どう思う?>と何度も自分の意見を聞かれ、そのたびに何も言えない自分がいた。これからは、自分の頭で考えて、自分の意見を持たなくてはいけないのだと思うようになった」「(聞き取りを行って) 自分はそれを周囲にどう発信していけばいいのかと考えるようになった」「今の平和な状態が当たり前になってしまっているが、それは当たり前じゃないんだってことを若者に伝えたい」等々のように、現代の平和な社会に生きる者として、何を考えどのように行動すべきかを突きつけられた体験であったことが語られた。

このように、生存者として「後世に語り継いでおきたい」「二度と戦争を起こしてほしくない」という強い社会的責務ともいえる被爆者の使命感が、学生たちのなかで、それを直接聞いた者としての責任感を芽生えさせ、「それを伝えていくために自分は何ができるのか。何をすべきか」という自分の行動としての問題意識へとつながってきたことが確認され、これを「伝え続けていくことの使命感」というカテゴリーにまとめられた。

### 【被爆は過去のものではない】

これらのふり返しをするなかで、被爆の影響が現在においても及ぼし続けているエピソードが思

い出された。近年、高齢になってからがんを発症された方、原爆の話は家族にさえ話してこれなかったことなど、健康被害や精神的な影響は今現在も続いている方が少なくないこと。福島原発事故が発生した後に聞いた被爆の話は、学生にとっても他人事ではなく、被爆者も今現在は福島のこととつなげて考えていること。そして、被爆の体験が職業選択の方向性を決めた方など。このように、被爆という事実は過去のものではなく、現在の心身の健康や生活、仕事や生き方にも影響を残し、また今後も与え続けるものであることがあらためて確認された。そして、学生たち自身も「被爆」と「被曝」の問題を自らに関係することとして、第三者的に捉えるのではなく、自らにも関わる問題として同時代的にとらえるようになり、これらを合わせた意味として「被爆は過去のものではない」とカテゴリー化した。

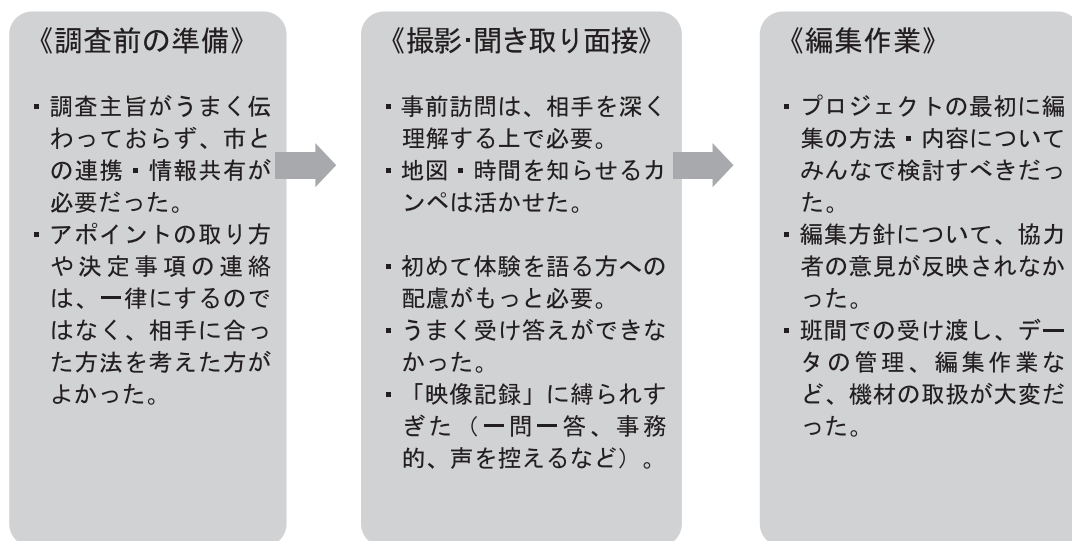
以上、被爆体験の「語り」から学生たちが学んだことについて整理した結果を示してきた。聞き取り調査を行う前の学生たちは、「被爆」に対して「それほど深く考えてこなかった」か「衝撃的でひどいイメージ」「否定したい・受け入れられない過去」といったいわゆるステレオタイプのイメージから受けとる印象を抱いていた。しかしながら、調査協力者によって語られた＜被爆体験＞は実に多様であったばかりでなく、その＜被爆体験＞は、手の届かないような特別な人々の体験というよりは、ごく普通の日常の上に原爆が落とされ、奪われた生活であり、二度と繰り返してほしくない出来事であった。だからこそ、その経験を活かす生き方や核兵器なき平和な社会を痛切に願い、求め実践している姿と出会ったのだといえる。

また、被爆者にとっての＜被爆体験＞とその＜意味＞は決してひとくくりにできるものではなく、きわめて、個別的なものであるとの認識に変化した。同時に、「語り」のなかで繰り返し伝えられ、あるいは込められている「後世に伝えていかなければ」という＜義務＞や＜使命＞を受けとめるなかで、さらにはそれらが自分自身に向かって発信されている言葉でもあることから、学生たちはその継承の義務を自らに託されたものとしての自覚を増し、自分自身の発言や行動をどうすべきかという問題意識に支えられた主体性を形成させることにつながっていった。さらには、それらの継承すべき＜被爆体験＞は、現在も被爆者の心身を苦しめることで影響を及ぼし続けているだけではなく、福島原発を契機に＜被曝＞の影響を受ける現代の問題としても新たに存在している脅威であり、それ故の「使命感」もよりいっそう強く認識するにいたったようであった。

## （２）援助としての聞き取り調査から学んだこと

本プロジェクトの２つめの教育的なねらいは、援助者養成の一環としての「援助としての面接技法、および調査の一連のプロセスを実際に体験し、具体的に学び体得すること」であった。そこ

で、このねらいを評価するため、プロジェクト全体をプロセスごとにふり返り、気づいたこと、学んだこと、反省点と、インタビュー後の自らの変化はあったか、それはどのような変化か、といった事柄についてふり返り作業を行い、整理・検討した。図表10は、プロジェクトの各プロセスについての学生による主な評価を示したものである。



図表10 調査の各プロセスについてのふり返り

#### 《調査前の準備》

まず、調査前の準備に関しては、「プロジェクトの主旨が協力者の方にあまり伝わっていなかった。町田市との連携・情報共有をもっと密にすべきだった」「アポイントの取り方や、決定事項の連絡は一つの方法にとらわれず、協力者に合った方法を考えた方が良かった」「主旨説明はとても大切だと思った」等々の意見や反省点が出された。

なかでも市、大学、協力者の三者の連携・情報共有についての問題が出されたが、協力者への呼びかけと学生への橋渡しを町田市がとりもっていたことより、筆者ら大学側も市に任せ切りになっていた問題が浮かび上がった。しかしながらこれは同時に、学生のなかにプロジェクトの主体としての意識が形成されたことを示す意見として評価できるものといえよう。また、「相手に合ったアポイントメントの方法を考えた方が良かった」という点については、倫理上の問題から協力者のすべての特性を事前に把握することの限界はあるものの、そのことを認識した上で「相手に合わせた連絡・約束の取り方をすべき」という意見は、相手の状況に配慮することを大切にしようとする学生たちの柔軟で余裕のある発想だと評価できる。

### 《撮影・聞き取り面接》

次に、撮影・聞き取り面接については、撮影を進行する上での技術的な点とコミュニケーション技法についての反省点があげられた。撮影進行上での技術的な点は、「原爆の話を聞く上で、広島、長崎の地図を準備したことが活かされた」「協力者の方に『時間を教えてほしい』と頼まれ、カンペ（カンニングペーパー）を作ったためうまくいった」など、それぞれの工夫や準備が活かされた点を評価していた。また「事前訪問で（調査協力者の）性格や生き方を知ること、語り手が本当に伝えたいこと、語り継いで欲しい、残してほしいと思うところをより深く理解できるのではないか」と、「顔合わせと日程調整」という目的を超えた事前訪問の意義を感じ取ったようである。

コミュニケーション技法については特に反省点が多くあげられていた。具体的には「初めて被爆体験を語る方への配慮がもっと必要だった」「話を聞くことしかできなかった」「うまく受け答えができず、受け身の姿勢だった」など、被爆体験を初めて聞くと言ってもよい学生としては無理もない反応についての反省や、「語り手の性格、特性にあった相づち、うなずき、質問を心がけたが、もっとうまくできればうまく進められたのでは」「基本的に援助技術不足」と、概して減点主義的な厳しい自己評価が目立っていた。

また「映像記録」に縛られすぎて、「一問一答的になった」「事務的になってしまった」「声を必要以上に控えてしまった」ことなども出されていた。「一回めの訪問でなされた話の方が気持ちがかもっていて、時間的にも長かった」と２段階で訪問した形式の難しさが指摘されていた。映像記録作成自体もほとんど初めての経験で、しかも「撮影は基本的には一回」という制約や、「映像記録」そのものの作り方や仕上がりのイメージが明確ではなかったなかで、緊張が強くなってしまいうこともやむを得ないものと判断できるが、学生自身の厳しい自己評価は、それだけ今後に活かされるものであろう。

### 《編集作業》

編集作業のふり返りにおいても反省点が目立っていた。編集作業の段階では、編集の方法・内容を定めるために繰り返し話し合ったが、むしろ「プロジェクトの最初に、編集方法・内容についてみんなで検討すべきだった」「編集方針について協力者の意見を反映しきることができなかった」など、編集作業をスムーズに進めるための反省や、協力者の意向を反映できない編集方針についての後悔が語られた。

実際、撮影後の作業には映像データのパソコンへの移動、編集ソフトのインストール、編集内容の検討・選定・抽出・編集といった一連の作業が必要となったが、それらに必要な機材、編集ソフトなどにおいて、それを専門とする分野のない本学部の限界も相まって非常に限定された環境とな

り、そのための学生間での機材の受け渡し、データ管理が予想外の労苦を伴い、さらに機器の操作可能な人の限定と、その上でのキャプション付けなど、気の遠くなるような時間を要する地道な編集作業があった。

しかしながら、これらはもとより筆者ら教員も初めて扱うことばかりの素人で、適切なサポートができなかったことが何より大きな問題である。そのようななかで、学生たちが自ら教え合い、協力し合って完成させたことは高く評価されるべきであろう。

### (3) プロジェクト全体を通して学んだこと

最後に、調査全体を通して感じたことの整理を行った。これについては、このプロジェクトのポイントでもある「戦争・原爆についての学習」と「被爆体験を直接聞くことの意味」の2つのカテゴリーでまとめられた。

#### 《戦争・原爆についての学習》

これは、もっと勉強しておけば良かった知識として「戦争の概要」「戦争の知識」「戦後の日本でのアメリカの原爆、被爆に関する調査」「地理上での特徴など、一人ひとり違う状況について勉強しておけばもっと深い話ができただかもしれない」などの意見であった。

#### 《被爆体験を直接聞くことの意味》

本プロジェクトでは「映像に残す」という側面はあるものの、直接聴くことは、基本的には聞き手である学生との関係性のなかで、学生にむかって語られる個別のコミュニケーションである。このことは、筆者たちの期待以上の効果をあげたといえるように思う。

例えば、「多くの資料を準備してくださり、自分自身に対して話されていると実感した」ことや、「私たちに初めて打ち明けてくれたことを知り、そのことが嬉しかった」と語られているように、被爆者にとっても学生にとっても、そこには他に置き換えることのできない関係が形成され、それにより深い共感を生み出したことを想像させる。

また、「自分の意見を求められることも多かった。自分の考えを人に伝えることが難しいと感じた」、「考えることの大切さを学んだ。聞いて終わりではだめで、自分の意見を持つ必要があると感じた」などのように、被爆の実情を理解するだけではなく、それを次の世代へ伝えて行くために自分はどのように活動すべきか、という意識へとつながっていったようである。

## 6. 考察

本プロジェクトは、被爆体験の世代間継承を最大の目的として設定し、その方法として大学生による被爆証言の聞き取りとその映像化を行ったものである。そのプロセスのなかで、被爆者においては、少なくとも「話して良かった」と思われるような援助的な面接となること、学生たちにおいては、原爆について理解を深めることで戦争について学び、また調査プロセスと実際の聞き取り面接を通して、重大な心的外傷体験を背負った方のお話を聞くことの心構えと技法、そしてその重みを体験的に学習することをいわば小目的として設定していた。今回の事後調査では、これら大小の目的がどのぐらい達成されたのかを評価することを試みた。

### （１）大学生に被爆体験を語ること

あらためて事後調査結果を考察すると、被爆者にとって「大学生に被爆体験を語る」ことは、以下の４点のような体験であったと整理することができよう。

第一は、「気持ちの肯定的な変化」である。ほぼ全員の方が「語って良かった」と回答していたように、肯定的に評価されていたことにとどまらず、これまでほとんど語ってこなかった方の記述にも、「積極的に語るべきだと思えるようになった」「人に話す抵抗が減った」「気持ちの整理ができた」などあり、「語る」ことの効用を最小限でも引き出すことができたといえよう。

第二は、被爆体験を語ることがそのまま「体験者としての祈り」の作業となっていることである。このことはたとえば、「被爆体験の伝言が後世の幸福になりますように」という願いや、「無残に殺された人々の痛恨の思いを無駄にしたくない。語ることがせめてもの供養になった」との亡くなられた方への供養として語られていたことからうかがうことができる。

特に「放射能後遺症の苦しみを背負った被爆者は亡くなり、生存者の口は重い今日、少しでも実相を伝えることができた」との記述のように、体験を語るとは「体験者としての義務」であるとの意見が少なくなかったことは印象深い。被爆者にとって「語る」ことは、自らの過去に向き合い、体験を整理するにとどまらず、二度と戦争を繰り返して欲しくないとの祈りでもあり、そのための訴えを自らの義務として課しているものであること。同時に被爆者は、「生き残った者」としての数え切れないほどの苦痛や自責の念を抱えながら生きてきた方々でもあり、したがって証言という行為が、亡くなられた方々の死を悼み、冥福を祈る供養そのものとなっているのだと感じた。すなわち原爆についての体験を他者に「語る」ことは、自己の内的な対話だけでなく、「原爆の犠牲となった方々のための証言」でもあり、したがって亡くなられた方々との対話もそこでは行われているものと思われる。

被爆者が語る「義務」には、個々人の被爆体験を超えた、〈原爆犠牲者への供養〉と、体験に裏付けられた証言者として〈後世に引き継がなければならない使命〉という二つの意味が込められているのであり、そのことが被爆者として避けては通れないものとして、祈りとしての語りが行われているのではなかろうか。

第三の体験は、「原爆」についての物語の再解釈・更新ともいえるものである。完成したDVDを観た感想として「同じ被爆でありながら、一人ひとりの角度から語られた内容を知り、あんなこともこんなこともあったと思った。またいろいろ考え方も学んだ。」と語られ、また報告会においても協力者同士の会話には被爆をめぐる思い出や想いが尽きない様子がうかがえた。また別の感想には、「複雑。さまざまな原爆状況をよくまとめられたが、長寿の被爆者の証言・被爆翌日の出来事を話される余裕等、前後の話がわからぬ一般の方々に、常に戦災と全く違う、非人道的な原爆惨禍を伝えることができたか。いつまで経っても難しい問題である」と語られ、何度整理して語ってきても、他の証言を聞くにつれ、語り尽くせない問題や難しさがあることをあらためて確認する様子もうかがえた。

DVDに納められた「語り」は個々人の体験のごく一部であるのは言うまでもないが、「被爆体験」とはそこに生きていた人の数だけストーリーや心情があるのであり、おそらく何時間、何度証言をしたとしても、とうてい語り尽くせない被爆の体験があり、そしてそれは、他者の体験を聞くなかで、さらに自らの被爆体験が再解釈され、更新されていっているものなのではないかと思われる。そのような意味で、原爆体験をめぐる物語は、現在においてもなお更新し続けているのであり、私達が求めがちな、一言でくれる「被爆体験」などというものはないことをあらためて認識しなければならない。

最後の第四の体験は、「真剣な聴き手の発見」である。これは、「若者が真剣に聞いてくれることを知った」「学生たちの前向きな心に触れた」という言葉で語られていた。いずれの回答も証言の経験数が「今回を入れて5回以上」であり、なかには講演や執筆経験のある方もおり、「語る」ことに必ずしも慣れていない方々ではなかった。

今回のプロジェクトは、講演のような不特定多数の前で行う証言機会とは異なり、1班数名の学生（若者）が、直接体験を聞き取るという形式である。そこでは当然、学生たちの慣れない聞き取り面接に対する緊張もあったであろうが、目の前で真摯に、全身全霊で話を受けとめようとする姿勢が、逆に「よい聴き手」として存在することを可能にさせたように思われる。ワーカーによる聴き取り、研究者による聴き取り、それぞれ個別の面接としての意義ある「真剣な聴き手」ではあるが、学生には未来への可能性あふれる「若い聴き手」としての計り知れない「聴く力」があるように感じた。

## （２）学生による聞き取り調査に対する評価

被爆者からの学生の聞き取り調査に対する評価は、概して高評価であった。これは、学生たちの真摯な姿勢が、調査プロセスを丁寧に進行させ、被爆者の一言ひとことに真剣に聴き入る態度としてあらわれたことでそうした高評価につながったものと思われる。ソーシャルワークの講義では、共感的理解を可能にするための多様な知識や経験を積むことの重要性を指摘しながら、他方では「無知の姿勢」で語り手の話をありのままに聴く姿勢をも求めているのであるが、今回「知識は必要ない」と、原爆を一から学ぶ学生の姿勢が評価されたことは、面接技法の原点をあらためて確認させるものであった。とはいえ、地理的状況や原爆問題についての事前知識があったほうが良かったとの若干の指摘もあったことを付記しておく。

いずれにしても、本格的な調査・面接を初めて経験する学生が少なくない状況であったことを鑑みると、教育者として筆者らが面接技法への評価を気にしすぎた面は否めない。被爆者の回答にもあったように、今回のインタビューについては聞き取り技法そのものに対する評価よりも、この経験が糧となり今後の実践へ活用されることを期待したい。

## （３）学生たちのプロジェクトによる学び

「被爆体験の継承」という目的は具体的にどのような形で達成できたのであろうか。

事後調査としてのふり返り作業から明らかになったように、学生たちの原爆についての認識は、原爆投下の爆発や惨状といったステレオタイプの理解や、原爆は「受け入れられない過去」であろうとの一方的なイメージから、被爆の体験は一人ひとり大きく異なるものであり、かつ現在の生活や職業における意義に大きく影響しうるものでさえあるという理解に変化した。

証言内容は、「被爆者」という特別な人の聖なる体験ではなく、私たちと同じように普通に暮らしている人間の生活の上に原爆が落とされ、それによって一瞬にして家を失い、普通の暮らしを奪われ、アメリカ占領下で受けた非人間的な扱いの調査によって心を深く傷つけられた体験であった。さらに目の前の被爆者の語りは、まさに聞き手としての私／私たちに向かって話されていることであり、その体験を聴くことは、その方の人生と向き合う作業そのものだともいえるものであった。

これらのことから学生たちは、「被爆体験」を「特別な人の過去」としてではなく、自分たちと同じ普通の市民、普通の一人の生活者に起きた惨事という身近なものとして受けとめていくこととなった、だからこそ、その悲しさや苦難が想像を絶するものであったことを共感的に理解し、それらの困難を乗り越えてきた勇気ある人生に対して畏敬の念をもってうけとめ、静かながらも粘り強く耐えてきたその「生」に対する洞察を深めることを可能にしたように思われる。

原爆被害者の語りを聴くことは、語り手一人ひとりの、原爆によって被害を受けた人生そのもの

に対峙することであり、聴き手にとっても重い事実への直面となる。このことが、被爆の実情と平和の尊さを学習することにとどまらず、「私たちが語り継いでいかなければ」という強い使命感として確実に継承することにつながった。しかも、「体験の継承」は単なるその「証言」や「物語」の継承としてではなく、「自分はどう行動すればよいのか」「自分の意見を持つようにしなければいけない」というように、自らの考えと行動に基づく活動の方向性を探る意識が形成されていることが明らかとなった。

これはまさに、原爆被害者から「サバイバーズ・ミッション」が語られ、それを聴いた学生たちがその意味通り次のミッションを引き継いだことを示したものであるということができる。サバイバーズ・ミッションとは、ホロコーストからの生存者や被害者が語り継ぐ活動などにおいてよく用いられる言葉である。窪田（2013）は、サバイバーズ・ミッションはそれとして「社会的制度としての援助機関の組織性を持たないし、政策としての採用を要求しているわけでもない。しかし、個々の人間の、生死の境をさまようようななかからの復帰の体験は、ここでは、明らかにその特定の個人を越えた広がりをもって、他者に力を与えている。」と指摘し、ソーシャルワーカーの立場から、それを「ミクロレベルの社会思想、その確実な種子と呼びたい。<sup>（補注）</sup>」と論じている。

本プロジェクトで学生たちが直面したのは、調査協力者の多数が共通して抱いていた、強い、「執念」ともいえるほどの使命感であった。それはまさに原爆からの生存者、被害者の社会的責務としてのサバイバーズ・ミッション、換言するならば「ミクロレベルの社会思想としての種子」だったのである。今後、学生たちが被爆体験を語り継いでゆくとき、自分に向けて語られた被爆者の方々の顔を思い浮かべ、語りのなかからうけとめ、共感した痛み、苦しみ、怒り、悲しみ、そして絶望感などとともに、にも関わらず生きていく勇気をもつこと、元気を取り戻す人間の力、そして命や平和の尊さとその必要性などについて、自ら＜被爆者によりそった体験＞から紡ぎ出される言葉として、次の聞き手に語り継いでいくことであろう。

ソーシャルワーカーとしての実践という観点からみるならば、将来「現場」に出て、生活困難に対する具体的な援助を提供する時を待つまでもなく、このミクロレベルで受けとった社会思想を忘れることなく、大切に育み、友人、隣人、そして次世代へ伝え渡し、平和を実現するつながりを形成することが、既に町田市の評価や報告会のご反響に見られるように、社会的に期待され、また始まっているのだともいえよう。

## ６．原爆被害者への聞き取りに対する課題

### （１）事前学習と面接技法

本プロジェクトは実施までにおよそ半年をかけたが、筆者らがいずれも平和教育実践が初めてであったこともあり、決して十分な準備をして臨めたとはいえない。特に、平和教育としての事前学習は、広島平和資料館で貸し出しを行っている映像、文献等の資料をもっと積極的に活用したり、各種講演会への参加や現地訪問などいろいろ組み込む余地はまだあったと反省する。想像を絶する体験をした方への面接技法は、そうした丁寧な繰り返しの事前学習と合わせて何度か演習してみることでこそ、より効果的なものとなったであろう。

### （２）記録化の方法

聞き取り調査は２段階で訪問し、２回めに撮影を行うように設定したが、打ち合わせが不十分な点があり、初回で〈語り〉の核心部分が話され、本番では協力者の感情移入も語りの時間も少なめに終わった例もあった。また、編集方法や、内容の打ち合わせは、町田市と学生の意見で枠組みを決めざるを得なかったが、その点についても再考が必要であろう。編集によっては語り手の意図を歪曲する危険性を孕むことを考えると、編集権とはいかようにも作ることでできる絶対的な権力をもつものである。大学や聞き手が編集せざるを得ないとしても、編集方針において極力語り手の希望をくみ取ったり、編集後も一人ひとりの「生の声」を大切に語り継いでいくことが、編集後のより重要な課題となろう。

## ７．おわりに

「被爆体験の風化」と叫ばれて久しく、無関心層も多いといわれるなか、戦争や原爆を経験していない人たちに被爆の惨害をいかにわかりやすく、客観的に説明し、同時に被爆体験から生まれた強烈な平和への希求の精神と、あらゆる戦争に反対する抗議の意志を継承していくのかは、ヒロシマをめぐる議論のなかで大きな関心となっている（宮川 2003）。しかも、映像や新聞記事が伝えることができるのは事象の断面、実像の一端であり、そこには語り尽くせない被爆者の体験や当事者の数だけの被爆人生や心情があることを私たちは忘れてはならない。そのような制約があるなか、本プロジェクトも体験の継承を試みたものであるが、学生たちが、被爆者の語りを全身全霊で聴き、受けとめることで紡ぎ出しはじめた学びのことばをふり返ると、一般化され得ない一人ひとりの「被爆体験」をサバイバーズ・ミッションとして確実に見出し、そこに表現し尽くされない、やり

場のない憎しみや、憤り、絶望までを含めて、それらを自らの考えと言葉で伝える使命として確実にうけとっていた。

その意味で、本プロジェクトの目的である「体験の継承」は十分に達成されたということが出来るのではないだろうか。

#### <補注>

近年、サバイバーズ・ミッションは、断酒会などの自助グループ、暴力被害を受けた女性の回復支援、いじめや虐待をくぐり抜け、生き残った人々による語りの活動においても用いられるようになっていく。そこには、自分と同じ病や苦しみを体験し、亡くなっていった人々に対する社会的責務として、病気や困難の現状、問題性などを社会に対し発信し、同じ苦しみを抱えている人々を助けたい、この問題をなくしたいとの考えと使命感という共通点がある。実際、サバイバーズ・ミッションの「ミッション」を実現することは、非常に難しい。それは、個人の責任で解決できるものではなく、その国の政治・経済・社会の諸関係、あるいはホロコーストや原爆投下のように、国際的な関係と諸システムの矛盾までもが背景にあり、社会のありようそのものの変容を要求しているからである。この困難な事業を達成するには、まずはミッションを聴いた人々が、次のステップに進まなければならない。それが、サバイバーズ・ミッションを受けとめた人のミッションということになる。窪田は、このようなサバイバーズ・ミッションを「個人や家族を支え、力を与え続けてきた泉」と強調しながらも、「常識からすれば、神話は神話でしかない。現実的な効果はほとんどゼロということになろう。けれども、夢も神話も、苦難にある人間の記憶のなかで不思議な力を発揮して、座り込んでいる個人を立ち上がらせ、諦めずに努力する力に変貌するのである」とその二つの側面をきっぱりと見極める。その上で、サバイバーズ・ミッションが明らかに広がりをもって他者に力を与えている事実に対し、「一人の人生の戦いの成果が、このようにして隣人の人間に伝わってゆくことを、私たちは日々見ている」ことを確認する。そして、いわばその両者をつなぐ存在として、相互援助を担う人々が、苦難にある人々から紡ぎ出された言葉を大切に受けとめ、育み、力を与えられ、関係者のなかで共有し、次第に整理され、制度の改善・創造や、具体的な対策を形づくってきたことにふれ、援助専門職としてのソーシャルワーカーのミッションの一つがまさにここにあるのだと断言している。そしてサバイバーズ・ミッションは、そのような社会変容をもたらす力をもつものであり、だからこそ「他者のそれと結ぶことを通して、社会思想の初期形態にまで成長することのできる種子」だと呼ぶ。

被爆証言を聴いた学生が、「では自分はどう行動すればいいのか」と問い、一緒にプログラムを進め間接的に証言を聴いてきたわれわれもまた、「では、私／私たちはどうすればいいのか」と問

うている。おそらく、援助の現場でこの種の語りを聴いた多くのワーカーが、援助専門職としての自分、そして一個人としての自分に何かできるのか、何をすべきなのかを問うているのではないだろうか。それほどに、苦難にある人々の話しは深く、重い。その答えは簡単には出ないかもしれないが、窪田の望む専門職のあり方すなわち、「（ミクロレベルの社会思想、その確実な種子を）幻想や架空の願望と無視することをせず、具体的な日常生活の支援と併せてそれに水を注ぎ、必要な手入れや移植を手助けしてゆく、そういう幅のある専門職、そのような柔軟な援助を日常の生活のなかで生活課題との取り組みを通して行いたい」という姿は、援助専門職に限らず、語りを聴いた人々の進むべき進むべき道を示唆し、強く励ましているように思う。

#### <参考文献>

- ・窪田暁子（2013）「終章「生の困難」を越えて」『福祉援助の臨床』誠信書房 pp.221-234
- ・宮川裕行（2003）「平和教育をどう継承していくかー原爆被爆体験を語り続けるためにー」『軍縮問題資料』pp.34-39